

# 菊池 寛「一郎次、二郎次、三郎次」考

—— 童話作家としての出発 ——

箕 野 聡 子

菊池寛の童話作家としての活動は、鈴木三重吉によって大正七年に創刊された「赤い鳥」の賛同者となった時より始まる。「一郎次、二郎次、三郎次」は、菊池における第一作目の童話であり、「赤い鳥」(大正八年四月号～六月号)に発表された後、『三人兄弟(赤い鳥の本第四冊)』(赤い鳥社、大正十年三月)に、「三人兄弟」と改題されて収められた。以後「三人兄弟」は、菊池童話の代表作として、次に発表された「納豆合戦」(大正八年九月号)とともに、「今日でも半古典的な価値を持って、児童たちに愛読されている」(福田清人<sup>④</sup>)作品の一つとして高い評価を受けている。

「赤い鳥」に発表された菊池童話は、「真面目であり、理智的であり、その中に滋味を持たず、つまり寛の人間味をさらけ出したもの」(中西靖忠<sup>⑤</sup>)、「いずれも菊池の言う『道徳性』が明瞭に打ち出された」(片山宏行<sup>⑥</sup>)ものとして論じられている。だが管見によれば、「一郎次、二郎次、三郎次」についての独立した作品論はなく、過去の研究において「一郎次、二郎次、三郎次」は、「赤い鳥」に発表された菊池童話全体の大まかな特色のなかに位置付けられているにすぎない。本稿では、「一郎次、二郎次、三郎次」の独自の作品世界を考察するとともに、菊池の童話作家

としての出発が、菊池文学の流れにおいてどのような意義があったのかを考察していきたいと思う。

## —

「赤い鳥」の目次において、「創作童話」とは区別され、「童話」とのみ註書きされた「一郎次、二郎次、三郎次」は、典拠の存在が推測される童話である。鈴木三重吉自身が、「編集者の立場から、日本の児童のために、豊富な話材を話者（三重吉）自身のものに消化して提供する再創造の情熱」（関英雄<sup>④</sup>）に燃え、読者もまたそれを望んでいた初期の「赤い鳥」では、「再創造」の「童話」の発表は盛んに行われていた。「一郎次、二郎次、三郎次」は、「民話的発想の話の組立てのおもしろさ」（関英雄<sup>④</sup>）をもった作品、「説話文学に新しい人間的解釈をほどこし」（西本鶏介<sup>⑤</sup>）た作品として解説されているが、具体的な典拠の指摘はなされていない。だが、「一郎次、二郎次、三郎次」は、おそらく口承説話である「三人の兄弟」の「再創造」であると思われる。「三人の兄弟」の説話は、口承説話として全国に分布している。中でも、三人兄弟のうちの一人が盗人になる話は、「盗人型<sup>⑥</sup>」として分類される。盗人となったものが跡取りに選ばれる話と、兄弟の一人が盗人となった兄弟をその被害者となった兄弟の訴えによって捕らえるという話とが、「三人の兄弟」（盗人型）の主流となっている。口承説話である「三人の兄弟」の文字化された資料が、「一郎次、二郎次、三郎次」の発表以前にはなかったため、今回、菊池が実際に典拠とした資料の限定は出来なかった<sup>⑦</sup>。それ故本稿では、関敬吾氏による『日本昔話集成<sup>⑧</sup>』並びに『日本昔話大成<sup>⑨</sup>』の分類を参考にして、宮城県桃生郡の「三人の兄弟」を代表話例としてあげたい。次の表は、「三人の兄弟」と、「一郎次、二郎次、三郎次」との比較である。

	「三人の兄弟」	一郎次、二郎次、三郎次
三人の名	一郎治、二郎治、三郎治	一郎次、二郎次、三郎次
年 令	二十、十八、十六	十八、十七、十六
三人の類時	特になし	「背の高さも同じ位で、顔の様子や物の言ひ振まで、ど れが二郎次でどれが二郎次だか、他人には見別けの付か ない程よく似てあました」 （二郎次と二郎次） 「利口」 （二郎次と三郎次） 「正直」 （二郎次と三郎次） 「元氣」 （二郎次） 「三人の兄弟の中では、一番氣の強い」 「三人兄弟の中では欲の一番深い」 「勇氣のある」 （三郎次） 「兄弟の中では一番（略）氣も優しかつた」
三人の相違 点	（二郎治）「太郎兄で少しこつたねがつた」「欲のない」 （二郎治）「生れつきおとなしくて、兄弟の中では一番心 持もいい」 （三郎治）「兄弟の中では一番氣が強い」 「父つつあんが」「小判五兩つゝ」渡し、「三年の間」に 「思ひくゝに出世をして帰」ってくるようにという。	「両親に別れた」後「貧乏」な暮らしをしていた兄弟達 が「毎日の見込もなしに、ブラ／＼暮してゐるよりも （略）都へ行けば、きつといふことがあるに違ひない」 と決心する。 藤原道世の鞍馬参りの御車を引く牛に傷を負わされ、屋 敷にひきとられた後、家来となり、出世して検非遣使に なる。
三人の出生 の理由	お堂でみつけたぶっかけたお椀の誘いで泥棒の名人とな るが、欲がなく、金はみんな貧乏人にあげていた。	声をかけられた武士についていったため、大泥坊鬼童丸 の手下にさせられるが、後出世して、鬼童丸が源頼光に 殺された後は、多能丸と名乗り、大将となる。
長男の運命	道ばたでみつけた篋のおかげで長者のお姫さまの病氣を なおすことができ、婿に迎えられる。	
三本道で別 れてからの 長男の運命		
三本道で別 れてからの 次男の運命		

<p>三本道で別れてからの三男の運命</p>	<p>偶然懐からおちた銭により大蛇を退治できたことによつて、殿様に侍にとりたてられ、悪者を退治する役目をおおせつかう。</p>	<p>呼び止めた女の人についていったところ、加茂の長者の婿となる約束をすることになり、長者の死後、二代目を名乗ることになる。</p>
<p>三人の再会</p>	<p>故郷に帰る約束の前日、故郷へのみやげとして用意した金をとられた二郎治の訴えで、盗人をつかまえた三郎治は、それが故郷へのみやげのため金を盗んだ一郎治であることを知る。父親は早駕籠で呼び寄せられた。</p>	<p>十年たったある日、二代目加茂の長者からの訴えで横非遣使の一郎次が、長者の娘をさらった盗賊の大将多能丸を捕える。</p>

三人兄弟の三本道での別れとその後の再会。「一郎次、二郎次、三郎次」は、物語展開において、「三人の兄弟」とほぼ同じ図式をもっているといえよう。口承説話である「三人の兄弟」のうちのみずれかが菊池の知るところとなり、「一郎次、二郎次、三郎次」の典拠となったことは、この図式をみるかぎり明らかである。だが本稿で注目したいのは、二者の共通点ではなく、「話材を話者自身のものに消化して提供」した「再創造」の結果である。ここでは、菊池の独自性を検討する上で必要と思われる二者の相違点をあげておく。

まず、「一郎次、二郎次、三郎次」には、時代、場所、人物のどの点においても、かなり詳しい描写がなされている。次に、「一郎次、二郎次、三郎次」には、両親との別れ、鬼童丸の死、加茂の長者の死と、説話にはみられない世代交代の場面が多く描かれているのである。また、新しい世代を担っていく三人兄弟達の類似点が、その違いにもまして多く記されているのも注目すべき点であろう。

「一郎次、二郎次、三郎次」における菊池の独自性について、以上の相違点に注目しながら、以下、検討していきたいと思う。

「三人の兄弟」の説話が、時を単に「むかし」としたのに対し、「一郎次、二郎次、三郎次」は、時は「今から千年も昔」とし平安時代に設定した。菊池は、この時代設定を裏切る事無く、平安という時代背景を尊重し、歴史的特徴を考察した上での物語展開をしている。例えば、一郎次のついた役職である検非違使は、平安時代になってから生まれた役職であり、当時政治上で最も重要な位置をしめた花形職業であった。しかも、能力のあるものが、家柄を問わずつくことのできた役職である。この点で一郎次の出世譚は、時代背景を巧みにとらえたものであったということが出来よう。また、加茂の長者が語った彼の成功の一代記も、公地公民制が崩れて私有地が認められていった当時においては、十分に可能な出世譚であった。時を曖昧にすることによって可能となる夢のような出世譚ではなく、時代考証を怠らなかつた菊池のリリズム描写が生み出した「一郎次、二郎次、三郎次」の出世譚は、読み手に正しい歴史理解を促すものであったといえる。これは、同時期に発表された「藤十郎の恋」における歴史的誤謬が、菊池に後々まで「歴史」と「歴史的創作」<sup>64</sup>との違いを論じさせるきっかけになったことと対照的である。「一郎次、二郎次、三郎次」には、「赤い鳥」童話の読み手を意識した菊池の選択が読みとれるように思う。

菊池の読み手への配慮は、時代設定の正確さに留まるものではない。「一郎次、二郎次、三郎次」に登場する歴史的人物の描写に注目してみると、菊池の配慮は、さらに顕著なものとなっている。まず一郎次が出会った藤原道世について考察してみよう。藤原道世とは、左大臣として権勢をふるった、また、源頼光に大江山の鬼（酒呑童子）退治を命じた、藤原道長のことであろう。なぜ菊池は、道長の名を一部代えて登場させたのであろうか。菊池のこの配慮には、あまりにも有名な道長の名によって、読み手が虚構と史実とを混同してしまうことを回避する目的があったも

のと考えられる。「歴史的创作」が「歴史」とは違うように、「二郎次、二郎次、三郎次」の物語は、背景がリアリズム描写に支えられていたとしても、あくまで菊池の創作である。作中の人物達は、菊池によって生命を吹き込まれたのであり、説話の「再創造」の価値・目的もここにある。

では、二郎次が出会った鬼童丸<sup>64</sup>の場合はどうであろうか。「丹波の国のある村」から都に入った兄弟達を通たであろう丹波路には、酒吞童子が出没したことで有名な大江山（老坂の峠）を中心に、盗賊の出る難所があった。二郎次と盗賊との出会いは、このような歴史的背景を踏まえたものでもあり、結末の「ひどい違」を強調する上でも、二郎次のかかわった盗賊集団の規模の大きさを読み手に想像させる必要があったと考えられる。源頼光の名は、この読み手の想像の布石として、最も相応しいものであったろう。そして、源頼光の名を登場させながら、有名な「酒吞童子」（「御伽草子」）の引用を避けたことは、ただ怪力を自慢する鬼童丸とは違い、美女をさらい、その血を呑み、肉を食らったとされる酒吞童子の非人道的で極めて残酷なイメージを、「赤い鳥」童話の読み手に突き付ける事にためらいを感じた菊池の配慮と推測出来る。また鬼童丸の名は、酒吞童子の名に比べ、読み手の想像に自由な余地を与えてであろう。

三郎次の出会った加茂の長者の回想は、読み手に口承説話「加茂長者」を想起させて、一代での出世の可能性への理解を促した反面、出世の方法の違いを明記して、「二郎次、二郎次、三郎次」における菊池の創作の独自性を示した。そのように、菊池は、既に読み手が歴史的認識を獲得しているであろう人物の名を登場させる際、細心の注意を払い、またそれを活用したと思われる。ここには、「子供の純性を保全開発する<sup>65</sup>」ことを提唱した鈴木三重吉の「赤い鳥標榜語」に適う、読み手の存在をまず意識した菊池の創作態度が窺えるのである。

「二郎次、二郎次、三郎次」の結末に対するこれまでの研究における解釈は、「三人は三様の運命にもてあそばれていた」(中西靖忠<sup>60</sup>)とする運命説、「ここで菊池が年少の読者に伝えたいのは、三人の心根の違いがそれぞれの運命を決定したのだということだろう」(片山宏行<sup>61</sup>)とする菊池の「道德性」重視説の二通りに分けられるかと思う。ここでは、結末に対する新たな解釈を、三人兄弟の類似点と彼らが為し得た自立の過程とに着目することによって、提示してみたいと思う。

「三人の兄弟」の説話は、三人の旅立ちの理由を、彼らの父の提案としている。それに対し、「小さい時に、両親に別れ」ている「一郎次、二郎次、三郎次」の兄弟達は、「毎週末の見込もなしに、ブラ／＼暮してゐるより」「都へ行けば、きつといふことがあるに違ひない」という自主的な現状打開への希望から旅立ちを決心するのである。彼らの望むところは立身出世であり、兄弟達は、旅立ちによって初めて大人の社会の枠組みにかかわっていくことになる。また、「十八、十七、十六といふ一つ違ひ」の兄弟の年令は、そろそろひとり立ちしなければならぬ年令である。彼らは自立の時を迎え、それを旅立ちにより実践したといえよう。「めい／＼都で出世すれば、必ずどこかで逢へるに違ひない」という別れ際の兄弟達の会話にみられるように、彼らは別れ道に踏み出す前から、共通して自立を望み、「都」での「出世」を願っていたと考えられる。それは、作品全体を通しての、彼らの変わらぬ姿勢となっているのである。

一郎次は、「この上もない出世」と思った左大臣の家来となった後、「グン／＼出世」する。二郎次は、「お金がこんなに儲かるのなら」となった「盗坊の仲間」内で「だん／＼出世」し、三郎次は、頼まれて鬼といわれた長者の婿と

なり、「身代の十萬貫の半分の五萬貫を、都中に貧乏人に分け」ることで世間の評判を獲得し、「貧乏人を恵むこと」でそのまま二代目長者としての地位を確保するのである。つまりそれぞれが、出会った運命を自らの「出世」へと繋げていくのであり、彼らは共通して自立を成し遂げることになる。さらに言えば、二郎次と三郎次とは、新しくかわりあいをもった人物である鬼童丸や加茂の長者の死をむかえ、その跡を継ぐことにより、世代交代によって完全な自立の時を迎えることになる。だが彼らの「出世」に、彼らの「心根」の違いが、どれほど大きな影響を及ぼしたかは定かではない。

確かに兄弟達の「心根」の相違点については、いくつかの記述がある。しかし、一郎次の「正直」なところは三郎次と、「利口」なところは二郎次と共通する「心根」であり、二郎次の「元氣」なところは三郎次と共通するものである。また、二郎次における「氣の強い」、「欲の一番深い」といった他の兄弟とは違う「心根」も、三郎次における「氣の優しい」といった「心根」とともに、作中に「三人兄弟の中では」と但し書きがされる程度の違いであり、一般の基準と比べられるものではない。兄弟の「心根」の違いは、彼らがそれぞれの道で「出世」を可能としていく過程に疑問を抱かせないための記述に過ぎず、運命を決定づける程の効力を持って描かれてはいないといえるであろう。だが、三人が、我が身にふりかかった運命を積極的に享受したことだけは明記されたといえ、共に自立と「出世」とを望んでいた三人の兄弟達は、それぞれがどの道を選ぼうとも、選んだ道で「出世」し、再会の時を迎えたと推測出来る。三人がどの道を選んだかが特に重要ではないということは、作品冒頭において三人の兄弟達の類似点が列挙され、三人の際立った個性を消滅させていることから推測出来ることである。

三人の兄弟は、「背の高さも同じ位で、顔の様子や物の言ひ振まで、どれが一郎次でどれが二郎次だか、他人には見別けの付かない程よく似てゐ」たのである。一郎次を突いた牛も、二郎次を連れて帰った盗賊も、三郎次を呼び止めた女の人も、彼らがただそこにいたから彼らにかかわっただけであつたように、一郎次を家来にした藤原道世も、



二郎次を手下にした鬼童丸も、三郎次を婿にした加茂の長者も、それぞれに彼らの「心根」を見抜いたわけではなかった。別れ道での「たつた一足の違」によって彼らの迎えたそれぞれの運命は、彼らの「心根」の違いが引きよせたものではない。兄弟達の外見の類似は、それがまったくの偶然によって生みだされた結果であったことを強調したものと見えるであろう。彼らの「心根」の違いに注目することは、「一郎次、二郎次、三郎次」の主題を二郎次批判に限定してしまう危険がある。菊池は、この危険を回避するために、説話にはみることのできない兄弟達の類似点を列挙したと思われるのである。

「三人の兄弟」の説話で、「欲のない」長男が少しも「出世」しなかったのに対し、「一郎次、二郎次、三郎次」で、「出世」を望んでいた三人の兄弟達は、三人ともそれぞれの運命の中で「出世」を果たした。しかし、この「出世」は、兄弟達にとってどのような意味があったのだろうか。

「一郎次、二郎次、三郎次」は、「三人の兄弟が、三筋の道に別れた時は、たつた一足の違でありました。それが、おしまひにはこんなひどい違になりました。」と結ばれる。三人の兄弟が、既に彼らに与えられた社会的責任を越えて、互いにかかわり合うことが不可能であることを予測させる記述である。ここには既に確立された個人の生き方があり、たとえ兄弟といえどもかわり合えぬ他者の人生が成立してしまっている。「出世」した一郎次の役職が、検非違使と明記されている以上、一郎次には、「出世」とともに多くの罪を重ねていった二郎次を許すことは不可能である。また、二郎次が、初めて都の中まではいって押し入った家が、二代目加茂の長者となった三郎次の家であったのは、三郎次が譲り受けた身代の半分の五万貫をなお持ち続けていた「長者」であったためともいえよう。「こんなひどい違」は、彼らが別々の運命に出会ったために迎えた結果としてより、彼らがそれぞれの道で「出世」を果たした故に迎えた結果として描かれているといえる。三人の兄弟の「出世」は、必ずしも彼らを幸福にしたわけではなく、「出世」した故に社会的責任を負った彼らの「驚き欣喜悲しみ」は、受け身の運命悲劇への感情ではなく、主体的

な生き方の上に突き付けられた結果への感情として認識されたに違いない。

伊藤整は、「一郎次、二郎次、三郎次」の書かれた大正八年頃を、次のように解説する。

大正期になると、成功に対する疑惑が起った。(略)一般社会には立身出世欲として意識されていた特定の個人の超越者のイメージが崩れ出したのである。(略)菊池寛の『藤十郎の恋』が書かれたのもこの年である。

「藤十郎の恋」は、「一郎次、二郎次、三郎次」と同じ大正八年四月に連載の始まった新聞小説である。自身の芸に行き詰まった藤十郎が、密夫の狂言の工夫に悩み、茶屋の女房に偽りの恋をしかけるこの小説は、藤十郎の成功と茶屋の女房の自殺といった展開を結末で迎える。「藤十郎の恋」と「一郎次、二郎次、三郎次」とが、同時期に発表されたことは、ここでも注目に値する。源頼光に殺された鬼童丸にも、金儲け中心の「出世」を後悔する加茂の長者にも、「何人にも負けない存在となることを理想とする日本的な立身出世の認識形態」の挫折がみてとれるように、「一郎次、二郎次、三郎次」において、三人の兄弟の「出世」は、懐疑的に扱われているといえるであろう。

三人の兄弟の、そのときの驚き欣喜悲しみは、どんなでしたらう。それは、皆さん自分で考へて見て下さい。／＼三人の兄弟が、三筋の道に別れた時は、たつた一足の違でありました。それがおしまひには、こんなひどい違になりました。

子供が初めて自分を試みた時に彼らがおそらく抱くであろう立身出世の夢を三様に描きながら、どの道でも成功への懷疑を示した「一郎次、二郎次、三郎次」は、「年少の読者」に向けて書かれたというよりは、むしろ自立を前にした齡年層の子供達にむけて書かれたといえるであろう。口承説話のほとんどが「三年」後という短い期間をとっているのに対し、「一郎次、二郎次、三郎次」の兄弟達が再会したのは、「十年」という長い年月の後である。「皆さん自分で考へて見て下さい。」と読み手の存在を意識し、読み手に参加を促している結末は、自立を前にして「自分で考へて見」なければならぬ年齢層の子供達、つまりは「十年」という年月の建設的な生き方の想像が可能な子供達に、

「出世」という価値観への警告を発したものであったと思う。また、歴史的背景についてのリアリズム描写をはじめとし、細部にまで気を配った菊池の表現手法は、ようやくお伽噺をこえた象徴童話が生まれはじめたこの時代において、「リアリズムの表現手法と中心読者としての子どもが存在」（畠山兆子<sup>90</sup>）によって区別される、後の児童文学の様相を備えた進んだ作品であったということが出来るだろう。「赤い鳥」において数少ない優れた生活童話のひとつと評価されている二作目の「納豆合戦」とともに、「一郎次、二郎次、三郎次」が、「赤い鳥」作品群の中でも高い評価を受けている理由がここにある。

#### 四

大正八年二月、菊池は、大阪毎日新聞社の客員となり、芥川と連れ立って長崎へ旅行した。菊池は、「私はこの旅行をしながら、自分の思ひがけない文壇的出世に夢の如き思ひがして、（恐らくこれが自分の絶頂ではないか）と、ひそかに考へた」と「半自叙伝」に記している。前年に「無名作家の日記」（『中央公論』七月号）によって文壇にデビューし、続いて九月号に「忠直卿行状記」を発表して好評を得ており、「半自叙伝<sup>91</sup>」に回想された「出世」に対する菊池の喜びは、容易に推測出来る。菊池は、大正八年一月に、現在では菊池の代表作のひとつに数えあげられる「恩讐の彼方に」（『中央公論』）を発表している<sup>92</sup>。だが、「恩讐の彼方に」は、当時の文壇において特に評価された作品ではなかった。

「思ひがけない文壇的出世」を果たした菊池に、当時の文芸批評家達は注目した<sup>93</sup>。だが、菊池に「批評に対する抗議<sup>94</sup>」を書かせたことから窺えるように、「恩讐の彼方に」に対する批評は、菊池の「出世」に対する価値観への懐疑を抱かせることになったと思われる。この懐疑は、大正八年四月に発表された「藤十郎の恋<sup>95</sup>」と「一郎次、

二郎次、三郎次」との二作品内にも、表現されているといえるだろう。

以上のように、菊池の童話作家としての活動は、菊池文学の流れに添う形で始まったのである。また、一部の読者のみを相手に作品を書き続け、その評価を受けていた菊池に、新しい読者層の発見と改革とを意識させる契機になったとも推測される。結果として、読者を優先した、読者中心の作品の描き方を獲得することになった菊池の童話作家としての活動は、少なくともその出発点においては、後の「真珠夫人」の作家菊池寛を生み出す不可欠な通過点であったといえる。

## 註

- (1) 福田清人「赤い鳥」総論（「赤い鳥」復刻版別冊Ⅰ、昭和四十三年十一月、日本近代文学館）
- (2) 中西靖忠「菊池寛と児童文学」（高松短期大学研究紀要）第十二号、昭和五十七年三月、高松短期大学）
- (3) 片山宏行「菊池寛の航路（大正八年）」（紀要）第三十三号、平成二年十二月、神戸山手女子短期大学）
- (4) 関 英雄「赤い鳥」の童話」（「赤い鳥」復刻版別冊Ⅰ、昭和四十三年十一月、日本近代文学館）
- (5) 同前
- (6) 西本鶏介「現代日本児童文学傑作選Ⅰ」（講談社文庫、昭和五十五年五月）「解説」一七九頁
- (7) 他に、「宝物型」、「化物退治型」などがある。
- (8) 鈴木棠三編「川越地方昔話集」（民間伝承の会、昭和十二年四月）には、菊池の「二郎次、三郎次」とよく似た話が収録されている。しかし、鈴木氏自身が、「川越地方昔話集」のこと（「日本民俗体系月報第六号第八卷」角川書店、昭和五十年二月）に、採集民話の中に創作童話が混じっている可能性があることを述べているように、ここに収録された話は、菊池の作品の再話とみるべきだろうと思われる。
- (9) 関 敬吾編「日本昔話集成第二部の2」（角川書店、昭和二十八年八月）五四四～五五七頁
- (10) 関 敬吾編「日本昔話大成第四卷」（角川書店、昭和五十三年七月）七～二二頁
- (11) 菊池寛「藤十郎の恋」（大阪毎日新聞）夕刊、大正八年四月二日（十二日）なお、「藤十郎の恋」における歴史的誤謬の指摘に対する菊池の反論については、拙稿「菊池寛『藤十郎の恋』研究——戯曲を中心に——」（「文化論輯」創刊号、平成三

年五月、神戸女学院大学大学院）で紹介しているので、参照していただければ幸いです。

(12) 菊池寛「歴史小説論」(『文芸講座第二号』文芸春秋社、大正十五年十一月) 一―十頁

(13) 鬼童丸の話は、巖谷季雄(小波)編『日本お伽噺』第二十二編(博文館、明治三十一年十一月)の「鬼童丸」にみる事が出来る。菊池は、小波のことを「僕達が少年時代には、たつた一人の童話作家であつた」と記し、少年時代に小波の作品を「耽読」したことを「話の屑籠」(『文芸春秋』昭和八年十月号)に回想しているため、二郎次の出会つた鬼童丸には、小波の「鬼童丸」からの影響が考えられるであらう。「鬼童丸」には、頼光が鞍馬参りの途中に鬼童丸を退治する様子が語られていて、「二郎次、二郎次、三郎次」においては道世が行つた鞍馬参りの設定にも、小波の「鬼童丸」からの影響があつたものと推測出来る。

(14) 鈴木三重吉「赤い鳥標榜語」(『赤い鳥』大正七年七月号)

(15) 中西靖忠(前掲)

(16) 片山宏行(前掲)

(17) 伊藤 整「近代日本人の発想の諸形式」(『思想』昭和二十八年三月号)

(18) 同前

(19) 畠山兆子他『児童文学―はじめの一步―』(世界思想社、昭和五十八年四月) 九四頁

(20) 菊池寛「半自叙伝(第十五回)」(『文芸春秋』昭和四年十二月号)

(21) 「恩讐の彼方に」は、後に同じ題材を用いて書かれた戯曲「敵打以上」(『人間』大正九年四月)とは違い、飽く迄主人公である市九郎の心的描写に重点を置いた作品である。そのため、敵を打たぬ実之助の描写より、市九郎に自己救済の可能性を獲得させる二十余年に渡る洞門開鑿の苦行の描写に重点が置かれた。だが敢えてここで実之助に注目してみると、「十年」に近い年月、父の敵を捜して旅を続けた実之助には、家名再興の望みがかけられており、敵を打たぬ実之助には、「出世」を放棄した青年像が描かれたともいえる。実之助の位置は、「敵打以上」でより重要なものとなっていくのであるが、この二作の間に「二郎次、二郎次、三郎次」が発表されたことは、菊池文学の流れを理解する上で大きな意味を持つものと思われる。なお、「恩讐の彼方に」と「敵打以上」とについては、拙稿「菊池寛に於ける小説と戯曲―「恩讐の彼方に」と「敵打以上」とを題材として―」(『日本文学研究』第四十四巻第三号、平成四年十月、関西学院大学日本文学会)で論じているので参照していただければ幸いです。

菊池寛「二郎次、二郎次、三郎次」考

(2) 大正八年一月から三月までの間に「恩讐の彼方に」について触れた評には次のものがある。

「佐藤春夫「読後感話(一)」(「読売新聞」大正八年一月八日)、前田 晃「新春劈頭の月評」——菊池、吉田両氏の作品——  
 Ⅱ(5)「(時事新報)大正八年一月二十一日、本間久雄他「新年文壇合評」(「早稲田文学」大正八年二月)、相田夢南「菊池寛氏の一面観」(「文章世界」大正八年三月)、南部修太郎「菊池寛論」(「新潮」大正八年三月)

(23) 大正八年に菊池は、「批評家の権限」(「新潮」大正八年三月)、「批評家に対する不満」(「雄弁」大正八年四月)、「批評に対する抗議」(「新潮」大正八年六月)、「印象批評の弊」(「新潮」大正八年七月)と立て続けに批評家批判を発表している。

(24) 「藤十郎の恋」は、第四次「新思潮」の創刊号(大正五年二月)のために書かれたが、同人達の不評のため掲載されなかった戯曲と同じ題材を用いた小説である。なぜ菊池が、このような作品に手を加え、大正八年四月に発表するに至ったかも、菊池文学における流れを考察することによって、推測可能となったと思われる。

※ 本稿における「一郎次、二郎次、三郎次」についての引用は、初出に拠った。